

# 翻刻『幕末維新絵物語』 卷一

天理大学 佐藤 敏江  
大阪府教育センター附属高等学校 上村 厚貴  
中之島図書館 山田 瑞穂・北川 敬子  
中央図書館 小笠原 弘之・苗村 昌世・八木 美恵

はじめに

原資料は大阪府立中之島図書館蔵（大和銀／一三七）全六冊の内第一巻  
二十四×十七cm 表・裏表紙各一、本文四十丁。

本資料は全6冊で、各巻の内容は以下の通り。

巻一 自文政末至安政四巳 巻二 自安政三辰至文久二 巻三 自万延元申至慶應三  
巻四 慶應三卯歳 巻五 幕末人物傳 巻六 明治三戊辰

本書は所謂風聞集で、幕末から明治にかけて大阪を含め世間を騒がせた事件、大塩事件、切腹事件、津波、火事、オロシヤ国入津、將軍他界、櫻田乱、新帝都入、伏見合戦など世間の風聞を絵物語風に、一つのテーマにつき半丁ずつを当て纏めたもので、丁寧な絵（彩色）は当時の社会状況や風俗を知る手がかりにもなる。

当館所蔵の貼込帖「保古帖」を始めとした一枚摺の資料とも類似する話が多い事からも、当時瓦版等で世間で広く知られていた風説の類を収録している事がわかる（本稿最終頁参照）。

出版禁止令に触れる内容も含んでおり、写本である事、また、（特に巻一は）手摺れによる汚れやいたざら書きで字が判読不能になっている箇所が多い事から、貸本屋の本であった可能性が高い。

参考

大阪府立中之島図書館編『大阪府立中之島図書館所蔵 大和銀文庫目録』 公益信託大和銀文庫  
基金、二〇〇四年

凡例

原本の忠実な翻刻を原則とし、旧漢字はそのまま表記した。  
異体字は標準の字体に改めた。但し方（より）欵（歟）べ（しめ）などはそのままとした。  
かなの古体・変体は原則として現行の平かなを使用した。

但し、江（え）・者（は）などの慣用字は、原本のままとし小字で表記した。  
反復記号「ㄣ」「と」「く」等は原本の通りに表記した。

原本に句読点はないが、読みやすくするため編者において半角のスペースを設けた。  
解読不能の字は□で示し、誤字や確定できない文字は（カ）と傍注した。

切支丹首領 貢

罪科□□□□□□  
三年か七年□□□□

天保二年切支丹吟味なされし所追く其徒□□□段くたぐりくける所はおしへし物ハ今京都  
官方江仕官いたし居る貢トいふものこそ切支丹伝授せし也申ける方与力之内京都官方江捕へか  
たに行んといふものなし此時大塩我レむかい生捕り来るべしと早と京都江登り長はしの局使女  
トなりて検式高く威にまかしてこはミけれども事ともせず理をもつて伏さしむる事書にまなこ  
をさらしける与力なれば姿くニ生どり帰りおもふ事外の与力にてハ中くおよびたへたる科人  
也

其身の程をかへり貢は名を残し□□□□□□切支丹

矢部駿河守 東奉行

江戸□り  
大塩と馬あひ而浪華に來りてハ猶二人してたか 天保四年御來十五  
いにたすけ合勤中ハ親子の如くナリトいふ(カ) 東都江かへり給ふ

文政十方浪華へ出勤なされ毒にもならぬ奉行にて 只河々を堀 畑を川にいたし 海を山になし 数  
多人歩かけ水なぶりする事好物ナリ 是故に堀川淀川江通シ 森之宮之畑猫間川ト變じり 天保  
出来する皆く此奉行ナリ今にいたる迄其跡をのこしける故に 今文久にいたつて其場所くハ皆  
戰場に成る事 是ひとへに因縁のなす所なるべし  
東より來ると手津まの種見せず浪華の形替る□

年貢はかり

文政十四十月 此連中のかたく 文政元之ころ方はびこり出し たら威をかる狐ともなれとも名  
ハ猿ナリ 公義ヲ有がいなしにいたせしむくひ 其ころわる口に

大汐が出て鹿猿ハ流れけりト言 此御かたくハ皆食物ハ科人かたれしばナリ

- 梅田道為右衛門 あんどや十蔵
- ぬかや伊之助 新やしき千とせや
- 小野熊右衛門 鐙や万助
- おほこ条七 五十間住よしや
- かつらノ利八 末広忠蔵

外ニいろく小ざるアリ

弓削ハ飛猿ハからるゝ世の中に何とて八田連れなかるらん

堀の内吉□□

土佐ほり□村屋

天満山清八丁吏頭

とび田安右衛門西むき□り

金木 (是も以下破壊)

こふした所ハしつかりもふじやノ如し人ヲくるしめたるむくひかく乃ことし人ごとにあらず

## 六齋干店

大塩化姿にて平野町ニ而  
大せい引よせ教訓す

天保五年霜月十六日之夜すこし心あたり有テ平野町会所江おすハリ被成下役ニ申付せいらく之内  
我レたいくつ□と会所の古キじばんかり湯手ぬくひニ而ほうかむりいたしほし店ヲそめキける所  
象牙そうげのさい三ツアリこれいくらと尋にける干店金アト言ひねくりまわし其まもつ持てはしるとか  
や盗人よと外店よりも追ツふ其まゝ会所江は入ル大せい会所へ付て入今にけこミし物出せトいふ  
会所ハしらぬト言大せい申盗人をかばい玉ふハ同類とのゝしる衣類着かへ大しほ玄關へ立出ミ  
なゝかしましい何事とたづね玉ふ大ぜい只今ほし店之物とりについたすもの此内へは入たる  
に違ひなしはやゝ御出し下されトいふ大塩申我ハ公義之役人なれハ盗人いつくにかゞむとも  
出しくれんがその方之とられし品ハ直高いものか大せつ之品なるべしつゝまず我にかたるべし  
代呂ものによつて盗人ハ打首にも相成べし先いか□□物をとられしぞわれも大塩なれば商人アキントハ  
ヒイキ□はやゝかたれと□□仰られ大塩ト聞ひつくり驚天もふゝしろ物ハ安ひものなれハ大  
事御座なくトいふイヤゝ其方ハよけれども会所江ねたりこむ程に大切なるしろもの取かへし得  
さすへししろものハ是なるやとさいをいたしたもふほし店あたまかきける□□此やうなる品売  
たるトはと教訓被成けるト言

一の裏六齋之目を干店のつらを三粒乃才智おそれ舞

## 女夫橋はじまり

文政すへより噂高し天保二年□□ことし人わたりはじめるなり是矢部駿河守様奉行にて十町目  
通りに橋かゝる事ハ堀川くさり水を樋の口江掘割是故に此はしかゝる思ひがけない珍事なるへ  
し夫池めうとつづれしゆへノ名を橋に残こす此時大塩一騎いつきやうぜん当然之与力にて人も恐るゝなり町ゝハ  
人氣よし天保山もふしん最中也かミゆい床

一浮世うきよとて大道ハ橋海ハ山畑はたけの水は清く流れん

## 女夫池妙見堂建ナリ

天保九年に堂建チ鳥井遥拝所出来それより参けい群衆いたすナリ弘化嘉永安政万延今文久  
にいたりてますゝ繁栄いたしさながら能勢の如し。

一水上ハ琵琶びわの湖水この流れとて世乃落口ヲテに今堀川大塩の翌年也

□□□  
門はし

## 東奉行跡部山城守

水野越前のおいナリト言

天保七年ヨ浪花津江在勤也はしめ者組与力御目エ之時是迄之奉行と違ひ与力にむかいおれそれ  
なし其上与力ニむかい先これ迄之奉行ハ浪花はしめてなれば何分たのむトことバかゝるト聞しが  
われハたのまぬ也其方よりのたのむべしとけんもほろゝけんくわごしの申かた左すれハ与力ハ有  
ツてもよしのふても事済といわん計りのことバ与力一同行つづくミなく宿へかへり大塩隠居  
に此よし申かんできの大汐いかり心とうにてつしける胸を押エ過行ける所奉行それより段々  
大坂之米買江戸廻米いたし大坂ハかつへ死ゝてもかまわぬ仕方市中一統もこれをうらみくら  
す所大塩いんきよ大将分ト成り徒党にくわゝる人多くアリ天保八年にいたりていよく是を誅ちゆう  
する人氣より右之乱妨を引出しける是皆此奉行之業也

入浪華津江来ると相場を駿河なる悪事積りし富士の山城

此人奉行長だんぎにて足しひ□り

矢部駿河守様御奉出ニ而江戸行なれハ毎日之捌おもしろからず直さまほつたい隠居する也

大塩平八郎仏体ニ而隠居也

是天保六年也四十七也

是ヨリ猶書に眼コをさらし軍立軍法に身をゆだねする内 天保八年酉二月十九日浪華大乱となりしも此人采配とる也 是ハ十八日何にもしらず奉行跡部ハ東北之在と順見之時 東与力浅岡との中喰キト相成ル これ究境を思ひ十八日を待所 十七日之夜徒党之内東組同心平山助次郎夜ル返り注いたし 明十八日は順見之事露頭いたし それより十九日早天より大塩内よりのろし上る 東照宮 天満天神焼立而拾丁目すし船場火災と成り 是日本いたみ之元也 入丸めてもこころ丸めぬ

河井郷左衛門入水ト言

東組同心也

此人天保七方大汐に組いたしけれども何ノむくひやら白子ノ倅出生いたし 世間江はづかしくおもひ別して可愛ゆく 大汐の乱之 宵之年シ極月行かたしれず成にける

入是故此人組ミいたせ共乱妨之人數に加わらぬ事是にてしるべし 此片輪もの出生する事ハ崇禪寺敵打ノ節生田に助太刀いたせしおんりやういまにうらみ失さる故ナリ

城代土居侯江親の直訴

同酉二月十五日之事也。二人之子どもかくの如く直訴いたし 親の訴人なれハ御聞濟之上□倅とも忠勇をかんじ玉ひさつそく此よし江戸へ書かんにて申送り玉ひける。それゆへ此両家とも其まゝ苗字消エズ残りけるト言 別して吉見ハ親子とも立身にて簾元被成今に盛ふる也。是倅が孝心を感じ玉ひて也

入上町焼(カ)焼之時土井侯大手先に陣を居エ玉ひ 鎧ニ兜にて陣羽織着シ采配持床几に腰打かけ玉ひけるハ目に□しき大勇トこそ見へにける

吉見九郎右衛門倅英太郎蜜訴

河合八十次郎蜜訴

在と軍勢さいそく

天保八正月大塩とのに恩しやうにあつかりし人々 只民のうれいヲすくひ玉ふト心得 ミな一昧同心いたし 後に牢者申付られ大かた牢死多く有り 是年ヨリ大汐との心にのぞみあれバ百性强氣をさぐるる也 近国近在ハ時ノ奉行をにくミ居る所江大汐世行いたし候故いよく大汐になづミ在と町と端シにいたる迄大汐に味方スル也

入乱ぼう之節ハ皆く頭分にて勢イつよし、淡路町にて大汐陣くだけで方ミなく気がつく也 只夢見しこゝちとらわれトなりて夢さましける

橋本忠兵衛

入貴公とおれがちからをあわして

茨田軍治

白井孝右衛門

何ンでも奉行のくび引ツさげ

深尾治平

手がらしだいに敵キにあたらん

吹田村乱妨の未方ス

是も同く大汐味内なれハ其所ノ百性をなづけかゝる大変とハ成にける 大汐此変ヲよく知るゆへ前もつて百性ヲなづけ少となれどもすくひアル 夫故大汐之味方するもの雲霞の如シ 天保八酉二月十九日をはれとまち受 皆くいさましく出立ける ミなく大変之後入牢いたし死すもの多し といやでなし皆若武者ハ吹田村毒守口につらは般若寺

吹田神主切腹

宮脇志摩

おのゝがたの強勇にてやわか敵をほろぼさん事あるへからすいさましく

吹田村ノ百性

上田幸太郎 廿三才

皆く大汐の恩ヲかんじ先陣をあらそふ  
これ則とんで火に入夏のむしこれ也

後に牢死

曾我岩助 廿八才

牢死 奉行之首ハわれらが打とる

大塩徒党集会ス

天保七申とし東奉行跡部山しろ浪花を我かまゝにいたせし故かゝる乱おこる也 市中米とけしな  
い所ヲことゝく江戸へ廻米いたし 与力を芥タの如く取あつかい無法多くアリ それより組与力  
内々寄り集り打とる手段に落合けるト言

米乃直ハ上るのろしハ辰ノ刻大合戦に皆あわじ町

乱妨乃落着付し所也 浪花津半分焼討ナリ 恐るへし

同心

渡辺良左衛門

四十九才智勇 御とらへト成牢死ス

与力

天汐

四十八才これ

むほんノ頭取也

合戦ノ前日討死

小泉

廿才 猛勇ナリ

智仁勇 後

旗元に成り出せ

同心

庄司

四十七才

同心

吉見九郎右衛門

四十一才江戸へ参り

近藤五郎

廿五才 強勇 焼跡にて切腹

平山注進

是ヨリ 動乱

此奉行老中水野越前守ノ甥也 是ゆへに羽ぶりよし 在勤よりいよく米高直市中ノなげき大かた  
ならず 此奉行申事ハ浪花にハ竈多し 其れ故人数も多し 少とま引てもよしト言はなす 是より与  
力同心一致いたし打はたすこゝろになる也 天保八酉とし二月十八日之夜同心平山返り注ニ而  
露頭いたし大変ナリ

番 瀬田濟之助

小泉測治郎

天保七未ノ年来る東奉行 近習

近習

東同心

跡部山城守

原左衛門

井上新五郎

平山助二郎

金玉ちぢかまる

あつハれ忠臣

平山助治郎

すりや明日ノ

順見を相待おるか

今よひノとまり番も

あやしき兩人

十八日ノ夜注進いたし

動乱ヲ引出しける

後に江戸にて打首と成る

こしぬけ武士これなり

江戸ニ而打首ト成

惣くづれ

天保八二月十九日ハ東奉行跡部山城森口ヨ 東在順見ト申渡しける故、大塩ハこれ天のあたへ

と悦ひ其夜十八日ハとまり番瀬田ト大塩倅也。小泉かわりて其夜とまり番也。平山かくの如くなれハとうらんと成り奉行をうたんとして小泉打死ニス

て小泉の湊瀬とかわる世の中に花すゞしろの二月の旅 十四

原林左衛門 井上新五郎 決戦ス小泉湊二郎 廿才也

とまり番 瀬田濟之助 平山かへり注方小泉にたのまれ高擧を超へ口大塩へ口進是より大乱成る

### 小泉無念の最後 勞して功なし

天保八年酉二月十八日ノ夜瀬田濟之助 小泉とまり番いたし 明日いよく奉行東在所順見あるなしをさぐらん為とまり番いたしける 平山かへり注より此露頭いたし大乱と成りにける 小泉ハ此夜奉行の居間をねらひ打ちとらんと刀引さげくらがりへ這入ル 小かげより高木主膳飛ヒかり右之腕をうちおとす 是にてたおるゝ 是大汐が片腕の若武者也 かゝる剛勇もだまし打 残念く

て乱菊の花さかしくも只ひとり垣打超してちぎる一ト枝 鬼面

近習

### 渡辺新吾

小泉たまし打に合ハ最期達レおしき成口口

### 浪華の露

悪事ろ見より乱ほうのはじまり

干口天保八二月十九日東与力浅岡ヨ(ヲカ) 打出し東照宮社裏手ヨリ焼立るナリ 東藤屋鋪打こみ十丁目すじ一円に焼立其虚に乗じて奉行跡部ヲ初出して討とる手立なれとも大汐に恐れ両奉行城内江加勢ヲ乞ひそれより出馬する也 城内加勢ト聞大しほハ跡をくらし落うせけるともしらず あわじ町而大合戦アル也。城方かちとときを上ケ引とりける 是天保乱也 ち散りてゆく華も実もあるものゝふの末よしやに名を残しけん 勇シ

□ 権現さま  
天神さま

鉄ほう向ケテ打ナリ

### 市中焼立る

天保八酉二月十九日露頭より大汐やけすと也 朝辰之刻我家の庭よりのろし上る 先手はじめに向ひの浅岡玄関より五口筒打こむ 浅岡家内裏よりにけ出す 火筒引出し南江東堂和泉さまやしき玄関江打こみ十丁目すじ焼立る 天満はし渡り東奉行江口口寄る此とき橋ノ北詰江行とき南詰三げんばかり切りおとしける故 天神はしへまわる時同切りおとす それより難波はし渡り鴻池打はじめ 船場ひら五 天五皆く三井瓦町迄一円之火ナリ 両奉行城代土井様大手先陣とり玉ふ 列立て向ふへわたる船場霧何に恐れけんミだれそめにし

### 難波はし

大塩ノ軍勢大筒打立ミなく 披身ノ鐘かくの如し

### 城方のかちどき

御城番玉造口荒尾但馬守様出陣也

平のは西詰に出陣シ城内の手うちを

賞美し玉ひおもわす高聲に誉めたもふ 題

城方鉄ほう方坂本弦之助 十八才

大汐方火術之先生安田図書トねらい合

討とり首をかく 直様江戸行鉄ほう先生ト成 百石加増今三百石也

名玉ノ光り

文久三亥ノとしハ四十五才ナリ

一名も高き大坂本乃玉なれば的ハはずさぬ光りかゝやき

鉄ほう方

梅田源左衛門

やごう

近藤梶五郎

東組同心連判なれども  
乱ほうにハ出さるナリ

義によつて連判なれども底心悪にあらざれば乱ぼうと聞より家出いたし行かたしらず 事済て其夜我宅ノ焼地江戻り 浅ましき身をくやミ其所にて切腹 公義にも悪心にあらざる事相わかり跡目立ナリ 是レ連判中之冠頭ナリト言

一啼つるゝ蛙乃聲をぐめんと忠と義心乃道をもとめ舞

庄司儀左衛門

大言

東組同心四十七才大塩よりハ  
剛勇ニ而智勇すくれしなれども

倅書物之師なれハ  
義によつて組スル

二月十九日乱妨之人数にましハラズ江戸江直ごん 浪花津ニ而跡部之不行跡それ故かゝる乱ぼうに相成候次第老中ニ付申立有無によつて切腹いたさんと乱ぼうの日より旅用意いたし 江戸江行道大津にて捕手に掛り 大坂江引きわたさるゝ 白洲ニ而東奉行跡部をさんくゝに乃ゝしる詞にいわく お乃れ大坂奉行職にありながら大坂の難渋もかまわず江戸へ廻米いたし 水野越前がとらの威かるおのれらと一様におもふかや 此庄司が心ハ金鉄なり はやく首をはねるべし 只浪華津ノこんきうをなげくかゆへかくの如しト言

一氣ハ檜木花ハ桜木人ハ武士我ハ浪花乃露と消エなん

庄司

一此乱ほう…およバズ…同…覚悟

瀬田濟之助

生とらるゝ

天保八酉ノ二月廿一日 志貴山ノ奥にて大坂ノ役人南部ノ役人ニ見出され 取りかこまれ天罰ツのつかれたしト腕をまわし 南都ノ役人にかゝり大坂江引かるゝ 捌中に牢死と相見へ其後此うハさなし 是より古き家名ノ瀬田氏此時より跡無くなりけるこそ残念ナリ 是より大坂江引れ入牢之内死スト言 瀬田ノいんきよハ松原村せんちにて首くゝり死ス

一瀬田蛭賞 甑あれと抜つれて生どらるゝハ是ぞ味噌汁

三好屋夫婦剛勇

酉二月十九日 難波はしより装束ぬき捨船場江ハ渡らず其まゝ山さきノ鼻にて市中之焼るを見物する 其夜大汐親子瀬田氏浪華清水へ落付 舞台よりまたく見物ス 其時瀬田濟之助切腹せんといふ 大汐曰いやくまたく軍勢集メ籠あげするハちかき内也 貴公ハ今しはし縁者へちかづき 我と親子ハ少シノ縁びも有ハ又ノ再会いたすへしとわかれける 夫より此ミよしやへ食客ト成ル これ十九日ノ夜也

一一代じや名ハ末代にとゞめけり我ハ人ハもミよしや 御老中

大塩氏

ミよしや五郎兵衛

倅格之助

ミよしや女房

剛将

命にかけてお世話申さん

西与力内山鞆三好やを

うかががふ

天保八酉三月十一日ノ夜 下女ノ訴人によりて三よし屋宅に食客ニて相ハかり 何とそ友達ごかし

に召とらんと 大汐に直談いたし度と それより打とほり対面いたし長こと咄いたし 何卒古き友ノよしミにはやく 是を落チたまへトいふ 大汐申 かゝる場所に向ひ にははしる我にあらず 敵を引請切死すべし 心せつハかたしけなしトさらく 取あへず 内山もせん方なくかへられる。其翌朝とり方の役(ま) 人数多引つれミよしやへ向ふ

□□□西年簾元格に出世

### 三よしや手あやまち

天保八酉ノ三月 大塩平八郎父子内山計略にかゝらず 公義ヨリ召捕メシトリに向ふ時 焰硝エシヤウニ而あとくらまし 其身をかくすト言 残りし死がいつらハ焼たゞれ誰とも相しれず まづく 人気をやハラげんか 為大塩なりと申

ハ塩漬にいたし浪花ノ友達とはり付けにおこのふ 是にて一寸らく鳴りハ相やミける

其後之噂に大塩親子ハ薩州ニ住居之噂アリ 文久ニ戌方薩州家中ニ大塩平八郎ハ格之助之表札アリ 朝間から不事のけむりを浮名立チ

かたく 気をつけめされ

### 大塩九州落フナ

大坂東与力大塩平八郎同格之助いかなる術にや 三よしや五郎兵衛夫婦切ぬけ、人しれず薩州江たのみ親子とも安楽にくらす 文久ニ薩州候都守護之節お供いたし京都へ来り 三条通に表札アリト いふ

大汐平八郎

まづく 安しんく なれども気ノとくハ五郎兵衛夫婦しや

大汐格之助

やれく しんどやく これがさつまか大きな国じや

(石碑) 是ヨリ鹿兒島領

### 三よしや夫婦平山をのゝしる

同酉としあわ座三よしや五郎兵衛夫婦 大塩かくまいし科とかによつて江戸へ引ゆかるゝ 平山ハ注進ノせつ方牢者也 三よしや五郎兵衛ト対決之折、白洲ニ而三よしや夫婦平山をける 御前ハ脇坂侯也

三よしや夫婦ハ江戸中むかしの幡すいノ如し 兩人ともれんミンにて座しきニ而臨死する也 一名ハ龍野男三よしや魂イハ廣ひお江戸の筆にとゞめる

三よしや五郎兵衛

真事の男のすねいたゞきおろふ

東同心

三よしや女房

平山助治郎

大塩乱ノ後

### 天保八乱ヨリ米高あまた

人そんじる

いつく江にけても一同なれハ夜抜ハ決してなし

三月方百四十八文

此年右之通なれハ端シく に住むもの

四月方貳百廿文

売食くひノ道具ハなし 途方とほうに暮

五月方貳百八十文

首くゝり川流れ子と共に身なげ

六月方三百廿文 大道にたおれ死ス むかし方かくノ如くなる  
 七月方三百七十文 世ハ珍事といふべし  
 八月方四百文 サアノ大へんじや

同すへ方 九月中旬迄 四百拾六文ト成

かくノ如くなるもの大道にミちノ

十月より八十文ト成ル

たり めつらしからず

極月ハ上白六十四文成リ

四百十二文  
 四百十六文

死ニぞんノ生き徳ナリ

「けふ有りて翌ハいづくの水底みなぞこにふしき命の心とゞめむ

**盲人の剛勇** 村方 権兵衛

かた先キに手キず深サ八部口三寸

天保十亥六月童子ノ熊五郎とて菊童子ノ入墨いたしける盗人 手下壱人引つれ役人トしらず隠居所  
 とこゝろへ百目がけのらうそく二本カ庭へ建テ 内よりたそとがむる 童子こたへて今時分  
 に来るハいわでもしれし盗賊ナリ 権兵衛家内ハ裏へにがし我ハたんす脇さし出す 盗そく是ヲ  
 見てそりやこそどす開らきおるといふニ、権兵衛ハくらがりト思ひけるによく見へるト思ひ せひ  
 なくそろノ向むかひける 童子手下にばらして仕舞トいふ方はや飛ヒかゝる所 手下ふともノを切  
 りさげられたおる、 童子これヲ見て引かたげにげる 後に兩人ともおとらへト成 権兵衛褒美ほうび  
 五貫文奉行方いたゞく也  
 目くらと者跡から噂□聞く童子

**米屋町乱ぼう** 齒ぬきや

阿蘭陀ノト名高ひ齒ぬき齒薬商ふ

天保十亥八月米屋町某シ質物も取り少シ銀子かし付もいたす人アリ 其かり方今手つまり右之内へ  
 不納に相成り故 阿蘭陀にたのみ仲人にて米屋町江右之次第たのまれ咄しに参る時 米屋町利つ  
 よくして取あへず只蜂はらうやう煩ふノトいふ 阿蘭陀煩わすくらひならバ私仲人に参らず せ  
 ひともしはしゆうめんたのむとわびれども聞かず 阿蘭陀米屋町ノ詞じりをとらへ無法云たかい  
 にことばあらく相成り 男気なれハけんくわ引請 引ぬ心は旦那ヲ打切ルそりや人ごろしと米屋町  
 ハそうとうす 是故上之聞エ 同心ニ頭取方ニ参る時おらんだ同心もかまわす切そかかる 松浦との  
 むかふ疵受る 十七才也  
 「人トごとろめいに露命つなを繋ぐ米屋町もふ此世にハ我レもおらんだ

おらんだ

**金蔵** うぬらよつたら皆ごろししやぞ 我家へかへり切腹する

**亀ノ油売** 姓名幸二郎

同亥とし霜月此亀ノ油屋ハや師ノ仲間之よひ顔なれハ人を見下るくせ有り 此日侍一人店に立  
 是ハ何に付る油薬なりと問ふ 其時幸二郎つかふドに物いふ 侍わからすとひかへす 其間違ひ出  
 来油屋さむらひに向かひ おれかいふ事わからねバ切ルベシト云 四十才計之侍イぬく手も見せず  
 右之腕切りおとす 油や其まゝそこへこける さむらひハ跡も見すゆうノと東江行切られぞん也  
 片腕に成またノ顔役トなり八年計後に死々たるか かけも見へず  
 なにをこし□くな

へ尻り巾も箸持腕と生わかれこゝろ淋たる世をすごしけ□

□□□ないんくわ

松山のすい 光源十郎

天保十一子霜月銀主方三丸ヤノふれまい相すミかへりがけ向ふ方酔ひたる男行違ひニ箱丁ちんをけり上る 丁ちんハ其まゝ袋はちけ家来とがめける 右之男そこへへたり侍イなれハ切レと留守居にからだすり付る 留守居引ぬくと足を切りおとし給ふ 其まゝ公義江出るられける 国元江引越被成ル 切られ損ト成る 酔たんぼ死にぎハノ一首  
へきりくす片あしとれて飛びにくし ○酔丹坊よたんぼ

毛ふひて疵 玉江け  
ばし

天保十一子ノ正月二日 玉江はし南詰少シ西而姫路之家中六才ニ成る子息連レ年頭之かへるさ老人之男酒に酔ひ向ふより来り 前まくりて小べんたれく来る 二人よける程付きまわり来る 子息之袴ぬれる 親いかりよけて通るもの 何ノいこんありてかくいたせしぞやトとがめ給ふ 右之男乱酒なれバ 氣に入らずバさむらひの顔の立つよふ切レくトからだすり付てはなさず

了簡かよひ人也 悴連てよわきを見こんでトおもへとも悴が恐るゝやと悴ノ顔を見れハ小児申おとつ様あのものかたのみ居るもの切ておやり被成ト悴にはげまされ抜打に一刀切ル それ切て息たへたり

かいや街

駕籠かき岩蔵

悪酒ニ而うけわるひ男なれハきられそんなり

民之助

其まゝ悴ヲしる人にたのみ我レハ□□番所江かけ：

上町ノ主ごろし

廿三才ニ而逆はり付  
但シ野江なり

天保十二九月河内生玉ノ女やうしやう方親ノ手にあわず気ままほうらつノ者なり 十五才より城与力某方江奉公いたしける 十九才ニ而奉公引河内江かへる 其所の髪ゆいと密通いたし少と金入用之事出来候方またく男と申あわせ 先主人江手伝として召つかわれ居る これいつわりニ而金ほしさ也 ある夜旦那留守をかながへ顔へ鍋すミぬりて 主人之枕元之金子に手をかける所 母と女房四才之孫三人なれハ母目をさまし 何ものといふ間もあらず懐刀でさしころす 女房おき上る これも同く突ころす 子目をさます これもころす 我わ其まゝにけず着もの替エてそしらぬ顔 旦那かへりける時風呂場より出て泣く さつそくけんし来る時盗人ヲ見とめしやトいわれし時とめ申 ハイ顔ハ墨ぬり御座候トいふ 役人：顔のすみはいかにと問ハれ白状す

首おとさるゝ

孫 とく

烈婦 とみ

老母

娘 かつ

市中在領 素人道具店

弘化四老中水野との諸株ヲ潰しみなく無株ト成る 質屋 髪ひ床コ 油屋 酒や 風呂や 茶や何成とも致し次第 それ故素人我か門口く江此如く道具店出し我か所持之とうぐ売事はしまりて 我



### 水野領百姓

祝ひ事スル

弘化四水野越前公老中之内百姓をいため玉ひ毎年こんきうにおよび豊作にても実入なしこれハ郡奉行 村目附 下役人ノ私欲と相見へ十ヶ年ノ間百姓かたいき也 水のみ百姓ハ是にておもひ合スべし 此たび奥州棚倉へ国かへに付百姓家毎く餅つきいたし祝ふ 其内国替道具村ざかいまで持出しの人歩耆人も出ず たまく出るものあれハ銭先どりにてふすま四まい 障子四まい 荷ない道のり二里の所三貫文取ミ□しる也

### 淀の難船

人そんじる

弘化四戌ノ八月下旬淀川 下りふね天神はし南詰たるや船 船どうハ皆く下手也 京都へ登る人多し 東西御堂につとまる事ありてまたく下りも多し 車ノ辺にてかくの如し 一艘ハひら方にて難船耆人もたすかるものなし 一艘ハこれなり 樽やノ星ノあしきとしなり

### 蜂の合戦

上ノ天神（カ）高松

弘化四秋のはじめ上ノ天神蜂ノ巢凡大キサ三抱カエ長サ耆軒半 是に蜂ノむらがる事雲霞ノ如く 蜂ハ常てい也 高松屋しき御殿蜂ノ巢ハ二タだかへノ丸也 蜂ノ大キサ凡二寸アリ 一日ハ高松ノ巢へ仕かけ合戦スル 一日ハ天神にて合戦 人群衆する事軍勢ノおしかける如し 悪年ノ来る前表ト市中一とう心やすまる時なし

梅鉢と蒼ひの紋に陣そなへ蜂と蜂とハ十六ノ菊

### 上ノ天神

天子御わづらひ被遊しらせトいふ 文久にいたりて京都大變アリ

### 弘化五天神ばし変

此年地車十二番  
市場だんじり入水スル

六月廿二日町廻りしてかへるさ天神はし中程にてらんかんに行当テらんかん二間余も川中江落るとんじりもともに川中江落こむ 古今珍ら敷事也 方くより船をいだし竹ほうきヲかゝりに焚く 是も珍ら敷早ワざ也 是によつてけが人耆人もなく天神はし方下手の濱よりだんじり引上ケ つゝがなく引違ひ宮入もつゝがなく相済ける 余りふしき故爰にうつし置 人々よく御案内ナリ 天神ばしより地車下タへ落るを祝ひて

### 蛙合戦

堺すじ

死蛙こじきひらひ□□て持かへる  
高津黒焼に売ルといふ八寸之大将蛙行方しれず也

弘化五年秋ノはじめ道修町方北に当る是北船場トいふ 朝卯之こくより昼過ぎ迄之内いづくよりか蛙あまた寄り尺七八寸ヲ大将として五寸余ノ蛙 三寸迄之蛙双方へわかれ 大蛙ノあたまふり工合により軍ばいト見へて食ひ合ふ事ミなく剛勇也 凡三千四百集り双方とも血にまひれそこに死ス 人群衆する 此前表安政方文久にいたりてノ事跡おもひあわして見らるべし 是珍事故に寫ス也

此時大師染とて水気ある所をほれ者ろうは入しごとく染物出来る也

後年にいたり軍おこる気さしなりトミなくあんじ人氣あし

テモ恐ロしい蛙しやナア

## 嘉永乱

十貫文  
過料

老中水埜公在勤之節浪花諸株いため玉ひ 其後ばくゑきにおとし 七百八十町裏長屋にいたる迄 十貫文くわ料申付 何町の会所へ引はり付町内宿老 五人組に申付きひしく取立ける 是故に夜ぬけするもの首くゝり身なげ子を売てつくのふもの其数をしらず いかなる事にや 中ほど方止メル ◎出さぬ徳する者死ニぞん 家出ぞん有り 大水の引たる如く珍事なれハ 是にて 欲じる与力衆同心 兩奉行外二沢山アリ 証義ばる

「これや此ゆくもかへるもばくゑきをしるもしらぬも大坂之易エキ

いかに公義のいせいじやとて あほうくさい こんな時節に十貫ハきつあたる ぶぐひ仕方じや

天満山茂七山はらいなく 一連… かゝのてまへもめんぼくない

## 新地一丁目うら町大火

弘化午とし霜月二日子ノ刻より焼出し火出し之内燃エ切らぬ内東ハ堀川超し天神社あぶなし 十丁目北はつれ迄焼ル 西ハ河佐ニ而焼とまり別して大火ナリ うら町近江新一軒残る也 此日堂しまやくし裏焼方十三年目ノ午とし也 おチヨホ火付るゝニて是午とし也 亭主午とし女房午とし

## どく饅頭

まんぢう

久太郎町

嘉永五南せんバに紙を商ふ某の家に当廿七才之番頭アリ 生国廣しまにて母もろとも大坂住宅也 倅此屋に奉公いたしける 中年なれとも忠義者ナリ 母にも孝行つくしする者なれとも果固ノ因縁やら出入ノ醫者に毒薬を聞合し 旦那へある時ミやげといつわり只三ツたもと方出しける 旦那ハかゝる事とも露しらずしんせつ成ルものと悦ひ 此旦那かねく下モをいたわる心有ル人なれば下女お竹 丁兒庄吉をよび一ツ宛持タし きのふめいいたしたる鬻吉にも一ツ進すべし ト三人に一ツづゝ 三人礼いふて次の間にてたべるト其まゝ血をはきくるしむ 旦那ハ是よりあわてふためき子どもノ親くヲよひにつかわし まんぢうのしらへに成ル時番とうしらぬ顔して居る 公義よりとらへ御たつねノ節白状いたす 是ゆへに醫者もしかられ相濟番とうハはり付ニ おこな…

下女おたけ

十四才丁兒庄吉

十二才丁兒鬻吉

## あわじ嶋変火

へんくわ

それを折く江戸に大火アリこれミなぐ大へんノ前ふり

嘉永五年此とし安政とかわる 霜□□大埜ねむら近辺ノ漁ふね露の…網おるさんとこしらへ居る所 宵方くら□□なれハ船に□□いたし趣くわんとす□所あわし嶋□しろ方此如く火ノ…ミなく目をまわし□□る中に手向よき□□有りて□れを見る…子ノ如し□□方へ□ヒサリけるいまた□□人とも□からず それ方後かゝる火もなく段く変る

## ヲロシヤ国入津

安政元寅八月下旬大名 小名かくの如く陣どり 十月朔日に何となく帆ヲ卷上紀州浦江着スル 何

用ありて来るともなく只陸地陣々へ小船にて廻り海ノ深キ浅キヲどん□□にてさくる□□ナリ人無キ所ハ…船へ持…大王留中悪事…くアリ 日本… する時持かへらず 紀州方出伊豆下田にて地しん□時くだけ□ト云

廿五丁沖に繫つなぐ

土屋采女

浅田侯

酒井雅楽

佐竹侯

小笠原

自由自在じゆうじゆう ヲロシヤ  
てんま

嘉永五安政元ト改元寅のとし 八月ヲロシヤ入来り 天保山ヨリ未甲ノ方二十五丁沖に乗り居エたり 長サ廿五間横巾十八間 東藤陣家

### 笹米のふしぎ

嘉永四秋諸国一とう竹ノ先に白米ノ如く華咲ク也 是むかし方竹ノ替り目なる坎 下ノ世界ノ前表なるか…しき事也 いづれとも笹米とて団子にいたし食をする也 其年よりまたく米高と□諸を國いたむ

へ竹竿たけざおにつられても傘ノ骨ほねにも□用ニつられても□付事早し やうく文久にいた□□むかしの竹ノことに戻るなり 竹ノ年数来り建…見ゆ これらミなく善事にあらず 米高のしるし也

浪華渡辺橋おいはき

嘉永元年酉之極月 元ハ江戸簾元ノ息男だじやくにて家来とおほしき若ひもの壺人つれ、浪華にさまよひ来り 谷町すじ城同心に居をいたし 夜ナく大坂めつらしき故ひやかに出、だんく小つかいなく□□思ひ付にておいはぎト出かけ□□渡辺はし而者町人の往来をまちうけ懷中をさぐり着類はぎ取うりしろなし なんば新地へ遊びいる所おとらへ成引まわし獄門にいたる也 捌□□本善之助被□利生□□□す

へ渡辺の鬼の腕かひなにあらね共盗ぬすみてかへる心いばらき

天満ノ役方切らるゝ

領分の寺々破却へきやく

隠居ハ儒者なれハこゝろ猛し

嘉永四巳年常州水戸侯領分八十九ヶ寺かゝる乱国ヲ見て佛法ハいらさるものト住僧ハ国ヲ追イ出し皆く焼失ツス 釣かねハたくり上大箇に吹直ス 我國といゝなからかゝる乱ぼう一應オウ一席セキノ謀反にあらず 諸人はヲ見て大小名のよしあしをさつすべし 今後悔先にたゝす 盛衰とハ井伊ながら自分の不埒より事おこり文久三年亥にハ十五万石とり上ト成り今廿一万石ナリ 今元ノ如時の鐘かね修羅の道具と吹直しこんなうのみ目ハ水戸ないぞやカ

命ばかりはおたすけ…

殿中の雑言ぞうごん 福山

嘉永四うし五月當中万座之所 前田公此たび異国来る様子なれハ何卒唐人我レ一國江御まかし被成被下ト申奉る 此老中筆とう致しける備後福山安部公末席まつせき方すゝみ出 加州公の仰なれども異國ハまかされまじ、我カ一國下ノものが外国江取引いたしおるヲしらず顔に打すて置 此たび唐

人受取とハ事おかし□□と唐人ハ一家同士ナリ よく考かんかへて見らるべしと齒に絹きせず申ける  
 前田公むつとせしかど一座に細川 井伊どの 會津公 久留米公あひさつ而納りけるト云 安部と  
 のあまりく出来過キ意根と成る 後に異国方日本江願ひ書上る 長崎江持参かいふういたし奉行に開封  
 致さすへきもの 安部との天下御前にて開ふういたしけるを前田立出、此たひ異国方到来いたせ  
 し書 いかにせい急なればとて老中の我まゝなる事言語道断也 是にて長崎奉行ハあつてなきが  
 如し むかし家康公の法式ヲやぶり玉ふ事猶ざりならずと座ヲ立玉ふ故

前田公

細川公

有馬公

井伊公

老中

會津公

以前のかへしくらひテ切腹ク也

日本の剛勇こうゆう

◎ヤ五兵衛ノ伝

嘉永年干闕所となる時加州松崎に唐物蔵七十戸前 米こく蔵五十戸前加賀一國にてハ名高たか家が  
 らなり

毒水の露頭ろけん

◎ヤ五兵衛ろけんノ根元

嘉永二加賀ノ国州崎ヨリ南にて入江アリ 是にむかしより魚ノ住事多し 此入江をせくりて喰ふ  
 漁人あまたあり 三年前方◎五買取 人歩をもつて此入江埋メ田畑にいたし度のぞミ也 ぼつ  
 く埋ミ今すこし之所江漁師来り 魚をとる事日毎ナリ 魚無クいたせバ漁師もおのづから来るまし  
 魚をたやさん為異国方持かへりし毒を夜ノ間に流す よく日魚ハみなく□□ニ浮キ上る漁師これ  
 を取町江売カル魚をくふ人ミなく死する これ方露けんなりて闕所となるといふナリ  
 此マア魚のまたい事是どく水なれば魚ハミなくよハリいるゆへナリ

うらみの劔やいへ扇里  
小まき

嘉永四うしのとし極月年越之夜宵ノ口 小まき母ハ蜩はしへ買ものに出行し跡之事也 松之助ハ  
 古きなじミの小巻メ 我レ今手元あしく成しとて愛相づかし聞より おのれ小巻いつ□一度ハ刀□  
 □びトいへハ 小巻申けるハ人を殺ロすといふてころすものなし 何時也とも恐れすといふ 其夜  
 松之助忍ひ来り 小巻今日ノくわごん覚あんし内へ入 小巻聲立るなれとも節分之事なれハ近所  
 も世話しく出合ものなし 打切ル刀はづれあたまノ角そぎおとす 小まき其刀ヲつかむ 其ゆひ  
 三本おちる それよりおじころす おぼころす とふした事やら公義にてハ松之助聞合せよく永牢  
 ニ成牢死スミなく公義にて呵り置事 小巻ハたすかり一生かたハ也 文久三亥尼に成寺へ入ル  
 ひ三本なし

大善粹 松之助

よふもくなしミかいなく捨ことバぬかしたナア 覚悟いたせ

ハアレエ人ころしミなきておくれ

扇里店小まき

## すだれのおもかげ

嘉永三 六月北新地二町目淀吉とて大茶屋有 三月ごろ大病にて床トコに付内ノ仲居にしんまへ成ルも  
 のありてとこおりになくかいほういたしける ある日お家枕イコシヲ上亭主にむかい 我レ無く成候へ  
 バ此仲居のたねを目をかけ見捨なく跡へ直しやり下されト云言ス 長びく病床なれば兩人とも死す

る迄待ず枕元で色事出来る也 仲居もだん／＼かいほうつやに成り 旦那も濱のいんきよに借りし座しきへ来り 病氣ハいよ／＼けふかあすかの瀬戸ぎハに兩人をまくら元へよび かいほうの厚き札に我からたのみ置しに よふも／＼此間から兩人ながらわれをすておきしな 可愛さあまつてにくさ百ばいナリ おのれら兩人とりころし三年ノ内に淀屋の家粉もないやうにいたすべしト云死に往生ス 其後はま座しきのすたれノ内に人かげありといゝ出し人群衆する事数多ナリそれ方いく程もなくして淀屋ハ粉ものこらずなりニける

### とらや切手動乱

嘉永年中どうらんにならんとする前表にや 浪花ノ悪人之こしらへ事ニ而此たびとらや店仕舞ゆへ切手ならばや／＼取付るへしと橋と辻とへはりがみいたす これ故百まい持ツ内も老まい持ツ内もわれも／＼と群衆ス切手かへる人日ごとに老町内つまるナリとらやハ何の氣もなく引かへるあまり人数けが人出来るゆへ公義江ねがふ 役人来りてせいとうある いつわりの事にまどハされしと笑ひみな／＼引ナリ

「勢イの猛キ虎屋江数饅頭悪事千里もはしるもこんさつ 五東軒

〔看板〕「とらやいおつ」

### 野中轡や

中直り付又こいさかい

嘉永之末上町に住居する醫者二人有 老人ハ藝集州出 老人ハ長州出生大藤なにがし也 同商売敵ノ内に藝州之者心よからず陸尺トかたらひ大ふじを遠ざけんトいたしける 醫道にてハ大ふじにとりたり 大ふじにとりてハ重ね／＼いこん有ルなれとも了簡いたしいる也 有ル時中直りと申立酒肴こしらへ大ふじをまねき 事相濟座を開らかんとする時 陸尺大ふじに改めてけんくわ買ふ大ふじハ是をよく□□て有無ノ返とうにおよはず 二かいにて陸尺ノ首をはねる大へんと成り大ふじハ其まゝ内へかへらず公義へ出 右之訳申いかやうとも罪におこなひ玉へと命なげ出し 重／＼之悪事申上げる 夫方皆／＼公義ニ成御捌之上大ふじハ助命ス 藝州ハ流し物ト成 陸尺ハ死に損ト成り 大ふじハ公義ニ而醫者に成り今に本町に住宅ス 家れい／＼と盛ふ成 文久之ころハ□まいがた…

大ふじ先生

此人たすかり存命候也

陸尺源八

ころされ損なり

### 堂しま孝行むすめ

嘉永五うし年中 町ニ而□源才樹茂之貸家某シ病中之間に家明申付られ 其時娘十一才立うりほりへ宅替いたす とら成人之にしたがい孝心ふかく昼ハのり売 夜ハ町小つかいいたし親をやしなふ公義より褒美下さる 是鳥目五貫文ナリ 上より聞たゞしに成 以前ハ住居いづくと問ひ玉ふ 娘とら申いぜん堂しまなれども父長／＼之病氣に付 はつかしながら家明入られ此所へ宅かへ致候ト申ける 公義これを聞かゝる孝行なるものをほり出せし家主よひ出し 家あけ入し科によつて堂じまより褒美集メける それ方われも／＼と成渡辺はしすし 湊徳の店にかさるなり

米一俵 堂濱

とら女 十九才也

後に男持ちテ不幸多しト公義へ呼べるゝ

のり商ひやしのふ

## 骨堀腹切

はり宗  
家ナリ

江戸出生にて林小平太世三才 はり宗へいじに成り

安政元とらの極月城内之家来北ノ骨堀江通ひたがいに思ひ 来らぬ夜ハ小市まちくらす 小平太小市花にていぎる時ハ付ほなく直さまかへる 段々金銭とぼしく成後に逢ふ事ならず 親方ハ薄情なれハあわさず此客ヲきらひける 有日これ迄かりし借銭ヲ算用いたし またく小市をよびたがいに咄し 此日昼七ツ時に小市をころし直さま我レハ切腹する 大群衆ニ而こんさつ也 是珍事也 一妓ハほれ客ハあかるゝ世の中に難義とて恥を捨馬鹿すらん

## 小市

三町目中十の養子むすめ 別してほげた□らし

## 津波大変

道とんぼり川

安政元霜月五日くれ方より沖の方鳴り出し 紀州由良之沖中火出る 直さま海底動いたしかくのごとく也 木津川の大船道とんぼり川江おいぐりこみ 船ト岡との聲さもいやらしき泣いへ 目もあてられぬそどうふナリ 幸橋落る 玉造はし落る 住よしはし落る 幸町ニ而蛸といふ料理や椽より八百石余之船三よし突通し門口大家根の上に有り 珍らしき故に爰に書残スナリ 一蛸でも千石ふねをすくひこみ味噌汁に仕てすひな大変

## 地震後の変火

○北条四代方後九代□かゝる天変地変数多アリト云

安政元とら霜月七日 初夜トおぼしきころ此如く立のぼる 是いか成前表なる坎 古今まれなる事ども多し 別して諸国人氣わるし 乱ノ前表ハかゝる天変地変多し それ方段々代ハおとろへ 寅年より亥ノ年迄十ヶ年 段々つれに珍ら敷事有 恐るへしく 折々地変シ有ル事人氣よからず 是より先きいかゞ成ぞ 諸国おたやかならず 文久にいたりておもひあわしきつし玉ふべし 一人名も高き六ツ乃甲に火威で世ハ遣り栗毛あをり寅どし

一堂しまより戌亥ノ方にあたり凡一たかへトおほしき火天ヲつらぬきのほる事 其勢イ恐ろしく天火あれハ地火モある事也 只何となく人氣あり 皆これ前変なり 箒ぼし振動候間俗に一ころといふ也 其後老中首とらるゝ 段々諸国に変多し 今文久にいたりて異国方よせ来り 中国打くたく如素□交易す 此乱の元ナリ

## 六甲山

## 日本大地震

七八寸ゆるといふ也ミなぐ生た心地なし

安政元寅霜月四日 五日 古今珍ら敷大じしん数多アリ 世ノみたれ方段々人の気悪心なれハ天これをにくみ玉ひ 御いましめとしるへし 親子ノ間タにても用捨なく持タルものハ放さず 其情愛うすく 殊に他人ハ薄情の世界ト成 よつて是天罪といふべし 一此時府内の屋しき御殿くだけの 寺町金ひら画馬堂くだけの さくらばし一金やくたける 高堀ことくこける けか人多し 天満天神井戸屋かた座摩鳥居くだけの

一めきくと諸国一統由良之助是ぞ浪華の剛ひ山科 鬼面

一南無妙法蓮花経

世直し

たすけ玉へ

げろく

安政元年 津波

安政元年霜月五日地しん く〜にいたり沖どろく〜ト太鼓打如し 鳴り出し海つばい眠りさすと  
おもふ所津波おこり来り 道とんほり川 堀江川 長ほり 大船 橋く〜皆落る 安治川総人死凡  
千七百人ト云 此に而紀州由郎之沖式百尋ノ海ていより吹きあかる 百五十年前の津なみも此  
所より吹き上るトいふ 大変也

大星屋切腹

評判  
高し

出し店あんの紋所 巴紋図

安政元とらとし極月上旬 大ほしやとて尾上湯の川口へ夜ルく〜出し店の呑屋いかのあし 汁るい  
ヲ売ル 正直なる人癩性に相なり 住治：切腹いたしくるしむに 西へはいあるき 梅田はし東石ヤ  
ノ軒にたおれ玉ふ 群衆する事山の如し 其ころ噂高し 是珍事□れハ画にとゞむ  
一 大星屋腹剛多がふ切狂言是が此世の艶なまく切り

とほうもない大変な事□ さつぱり杓子じや 命すてずトとふぞマア  
ノ内ハさんく〜こつぱ□□ 仕やうもよくない事

小僧ころし

安政元寅極月 堀川東寺町富士派ノ正福寺住僧酒のミにて折く〜小僧に酒買にやる とういふ事や  
ら酒少シすくなし よつて小そうをいませつめ せつかんノ為石とうにく〜り置 よふたまきれ梅ケ枝  
にあそびかへりハ夜中也 ふト小僧之事おもひいたしうらへ行て見る 小僧く〜られながら雪に  
こごへ死す 此事上エ聞エ遠嶋に極り さつま新しまへゆくトいふ也  
一生にない龜相また仕るころへてくれよ コリヤ小僧 最はや事ハきれたり ざんねんく〜 かわいそうに

梅田ねりくやう

卯五月梅田境内に法善堂までかくのごとく念佛堂より足端をしつらいねりくやう名有 僧立チ其  
日をはれと美をかざり 天人姿三人アリ 所とに立どまり題目乃書たる蓮華をちらし これをひらふ  
人群衆ナリ

聖武天皇千年忌トとなへ三昧に法華堂と申立大堂を建立す

一 棧に華ぞ散りけりねり供養

御前造営

見分

卯之三月御ふしん出来いたし 中山 廣幡 橋本卿見分被成候 此とし東より変火空を鳴り渡る  
其音恐ロしき 光りつよく未申へ飛ヒたる也

中山

おそまつなふしんじや なげかわしい

姉小路

あたらしいハよいものじや

廣橋

念佛秘事亡門

入牢

安政二卯三月 元ハ江州之出にて後に落ぶれ木挽ト成し人ナリ 門徒の法ハくわしく文政ノころ女  
子老人母を持し女ノ養子ト成 少□□元よろしくなり 此久兵衛大法師之氣ざし有ル男ニ而只秘事

をおこない人に尊信そんしんしられるヲ 樂タノシミ 曾根崎そねざきに居キヲかまへ 生佛なまぶつといわれ数多人ヲまどわし 心ノ底  
ハ夜刃よるやいばノ如く 姉あねむすめお力りきとて 髪かみゆひこれをおかし 一男子ひとこヲ生なまし身持みもちよろしからず 門徒もんた寺てらよ  
り事ことあらわれおとらへと成牢なり死しス

一佛ひとつぶつから地ちごくへたんと連つれさそい

#### 大坂や久兵衛

公義こうぎも恐れず 講中こうちゆう凡およ三百人 是こゝゆへ廿七町にじゅうしちまちまちのかゝり也  
講中こうちゆう之人のひとと町まちあつけノ内死うちじするものミなく□り□ぼい也

#### 亡門の加入人

かくノ如ク死したる親おやにあわすト有ル 亡門むつもんに  
まどわされ加入か入金きん式しき百疋ひゃくぢこれ方かた講中こうちゆう□□ふナリ

#### 観世音

川かほり之時とき出現しゆげんアル

○善八ぜんぱち正直すくなく者ものなれともちに出師しゆしかゝり安治川あんぢがわ三丁目さんぢゆうめへ  
持来もちり講中こうちゆうこしらへはつむ 今いま其そのうわき聞きカズ

卯極うごく月つき公儀こうぎヨリ 役やくふねの川かほりざこばより築地きよぢ之間のちにて 九条くじゅうじょう善八ぜんぱちト申まをものゝ如蓮しよれんにかゝる佛ぶつ躰たい  
アリ 善六ぜんろく是こゝふ吉きちなりとて二度捨すてる それよりかわゆりかへとて二間にま半程はんぢゆう外がわにて仕事しごといたし居ゐけ  
るに またく右みぎ之の佛ぶつ躰たいかゝる 是こゝふしぎト見分みぶん之の役人やくにん是こゝへ見みすべしと申まをされける 善八ぜんぱちハよいさい  
わいと 旦那だんなそこへよろしうと渡わたしにげる それ役所やくじよへ持もかへり段だんく目め□□□す所に 是こゝ日本にっぽんに三  
躰たいの佛ぶつ也なりト云いふ 浅草せんそうくわんおんと同躰どうたいナリ 黄金くわんごんナリ 与力よりき持もかへりける所ところ其夜そのよノ夢ゆめに善八ぜんぱちへかへら  
んと云いふ よく日ひわすれ持も参まゐり候所こうじよ 其旦那そのだんな大ねつはつし早はやと善八ぜんぱちへ戻もどす 善八ぜんぱち棚たなにかさりける所  
何なにのたゝりもなく参まゐり候こう人ひとおいくぜんくわいいたす故ゆゑ 善八ぜんぱち川かほりをやすみほうじばかりで女  
房子むすこ安やすらくナリトいふ

#### 奇童

当三才

元此平兵衛ハ尾州之産レなり 是秀よし之再来ともいふナリ

辰たつみノ三月 播州はりゅうしゅう加古川かこがわの住人すまひ大工平兵衛だいこうへいべゑ之の倅こゝレ千代松ちよだまつ 当三才たうさんさいなれども平人へいじん七才しちさいくらひの體也たいなり カラ  
つよく子どもト遊あそバズ 只武器ただぶきをこのミ力ちからわざ打合うちあひすきなり 瞳ひとまニツアリ  
一足ひとあしノうら菱ひしの形かたち三ツ重也さんつじゆうなり 此事このこと殿どのに聞きコエさつそく召出めいだしし東都とうと窺のぞひトなる 其上そのかみにて御扶持ごふぢ下くださ  
るゝといふ 是古今ここんの奇童きどうなるべし

加古川かこがわにうそじやござらぬ本蔵ほんざうじや栄目さかめ出いたき五葉ごゑの千代松ちよだまつ 鬼面おにめん

おりや日本の大将だいしやうじや

#### 生玉正遷宮冠頭

同辰どうぢんノ四月 五十日いそひケ間正ません宮みやとて いろくしやれもよふしけるうちに ◎いらすおもしろしと  
て是秀逸しゆういつトス 生玉屋なまたまやしやりん玉吹たまふきけハ御出家ごしゆけや尼にが出る 此こゝヤ道具たうぐ一式いっしきノ行ゆれつ 旦那だんなハ殿どのさ  
ま也 白木綿直しろわたシ□下くだニ而なり一反いつはん三朱式さんしゆしき百文ひゃくぶん 高麗こうらい下駄くだ老東代らうとうだい百五十文ひゃくごじゅうぶん群衆ぐんしゆう□□むかし玉造たまぞう稻荷砂持いぬさぢ  
に出いし如く内うち□廣ひろゲ出いてるゝ也

一東西いつとうせいが南みなみに北きたも氣きが揃そろひ我われもゆくならおれも生玉なまたま

コリヤ奇妙きせうじや ハイハイ よいおもひつきじや

三人兄弟ごうりき

安政三辰ノ五月 肥後国天草郡百姓藤四郎代々力孫に□□もたしなミ 爰二代ハちからみせずか  
く乱ヲ引出してより 女ながらも力わさをこのミ遊び事にもかくのことく 是段と上とへ聞コへ三  
人とも殿さまに見えいたし 壱人まへ五十石之扶持下され 貳百五十石之扶持方ト云 藤四郎も  
ゆたかなる百姓なれども 是日本大けいトま(キ)すうらやまぬものハなかりけり

民江 十三才

中むすめハ常にすしがね入たる棒を□□みよく  
つかふトいふナリ但し目方八貫目ナリかしの木ノ作也

田霧 九才

わけて妹の力底しれずと評判

菊女 十八才

これハ俵ものとなやむかうといふ

下女の忠臣

磯

当年二十三才東都ヨリ直褒美銀五枚  
是かくし目付様ノ御目にかゝる故ナリト云

安政二辰ノ五月中旬 京町ほり紀伊国はし近辺に長く売り弘めし墨商ひいたし 男女ノめしつか  
い有り 此いそ十七才より奉公いたしける 別していたハリつかい下さるゝ 十九才之時ふト旦那  
眼病ト成り是に金銀なけうつ事おびたゝし 加持祈禱も利かす 其内に身上不如意に相成 引おい  
ハ取られ懸ハとられず 奉公人ハ悪事いたし出ゆく お家ハこれを苦いたし死去す 残り之ものハ此  
磯と旦那ト二人なり 諸商人も□重なれば一文もかさず 此下女乃實ていを見 其少々ノ物ハ取引す  
トいふ 今生死におよぶ時 下女ノ親磯に申来るハこのころよい嫁入口あり 殊に親方に借用ある  
といふでハなし 盲人を家へあづけはやく 隙とりかへるべしとさいの使イなり 此時磯申ける  
ハわたたくし外へかしづくとも着ものハ一まいもなし 殊に半季のわたしなれども 長く目をかけ遣  
ひ下さつたる恩かへしなれば此まゝ死ゝてもおしからず わたくしなれば主人ハたちまち露頭に  
まよひ玉ふべしトおし合之内聞合入褒美ナリ 両御奉行様ハはるあき町内も不首尾大はらひ  
是珍せつなれハ書ス也

磯ハ御城代御目見へニ而御ほめのことバさがる也

磯此恩ハ死してもわすれぬぞや

北野竹式

そうじふ

同辰六月 新地裏三町目美濃屋喜兵衛トいふ古道具やノ悴喜太郎トいふもの 女房もらひ候ところ  
夜あそびいたすかくせにて親父と馬あわず ますくやますする内親喜兵衛嫁と密通す 喜兵衛女  
房うるさくある時めうとけんくわ方此事あらわれ 悴喜太郎親をころすといふ それ方嫁不縁と  
して親元へ戻どす やうく噂さずミける内 親喜兵衛折く嫁の在所江逢にゆく またく悴くる  
ひはり熊の雪のと申妓になしミかさなりける所だまされるとハしらず ◎なくなるまでい玉(カ)  
ひける雪のハつとめの身なれば相手にならず外ニ客有 □へ北野むら竹式へ男二人つれ逢にゆく  
をまちふせにて切ルナリ さつそく牢者申付られ 右之次第なれハ親のねがいわるくしてらう死す  
といふナリ

六…うらみも積る…

うらみノやいばおもひしれ あれへ人ごろしく

和助

吉蔵

ミなくはりくまノ男にげる

神崎の喧嘩

同辰ノ七月 中山寺例年世三所の観世音寄り集りたもふとて 九日ハ夜通シに参けいする事ハむかしよりよく人のしる所也 翌日十日かへりがけ 神さきにて何の云あがり共□からず はしめハ馬かた牛おい こなたハ参詣人三人連レなり 多せいに無せい叶わすトおもい 三人思ひ合ふてはたらく 其勢に恐れミなくにけちる またく所ノ若ひもの出て三人ヲとりまく それ故大へんとハ成にける 此事公義へ聞へ 皆く牢者申付らるゝ

ハ此とき入らざる事にて死人も二人けが人多く有 神さきの方ハ負と成る 参詣人ハ道すしなれば 皆客なり 馬かたの時出てあひさつすへきはづ またく事を引出せし故ナリ

ハ佛から修羅乃ちまたへ 導引れ床ハ針の山あほな我鬼道

くるしいくたすけて下され 此うらみはらさいでおこふか 何ちよこさいな  
たれぞきてくれ叶わぬく とほうもないこんのつよいヤツじや

天地大動乱 雷

安政三辰五月十日ノ朝ヨリ鳴り出し日暮マテヤスミなし 天墨を流せし空にて恐ロしき事たとへんに物なし 往来ハ一日なし 家内より外物いふものなし 鳴るきびしき事ふとんかつきて耳おさへても家□□くゆへ生たこちなし 千年このかたの変といふ 稲光りにて目ハくるめくナリ あげ之朝上之帳面にとまる 雷落百八十二所トいふ 此時米八十五匁也

ハてん未雷古雷稀鳴る天災で□ふとん□  
こと以雷御無用

寶市乱

安政四巳ノ正月廿日 例年寶市とて兵庫 大坂 有馬 伊丹 三田辺ヨリさんけいする 別して人群衆ナリ □寶店之もの酒興に乗して参けいノ武士に無礼す 武士も人之あいさつニ而行たもふ いつの間やら跡よりつけ来り さむらいをとらへ足にて蹴る いよく了簡ならず 引ぬくよと見へしがからだニツに成てたおれける 是尼ノ家中 其ま御いとま□るといふ

ハわざわひの門より出る風ならば我身にあたる春乃朝露

尼ノ家中

はやし力造



「天地大動乱 雷」



「樹変 人間の眼ヲくらます」



扉・見返し



表紙

大岡山文庫  
137

上段4点：『幕末維新絵物語』巻一より

下段2点：『保古帖』五巻より

(ともに中之島図書館所蔵)



「浪花大雷落場所附」



「西横堀西州寺銀杏女の形に見える事」